

◇ プロローグ 3・11から1年9ヶ月、4つの事故調報告書が8月に出揃い、9月に新エネルギー戦略「2030年代原発ゼロ」が発表された。脱原発の祖上である。しかし解散崩壊の民主政権、旧態変わらぬ自・公保守、我が国原発の道筋は当分決まりそうにない。先進諸国は3・11後脱原発依存に舵を切った。新興国は拡大経済を担保に変わらぬ推進であるが、リトアニアの国民投票の如く、ネット社会の民意は超スピードで進化する。フクシマが原発の哲学を変えたのだ。決められず、変えられない日本は「フライパンの煮え蛙」*1に陥っている…。荒れ狂う政争の具となっている日本原発や如何に…その基盤を求め、事故調4報告と全国紙社説をやじ馬流に裏読み検証し、会員各位の冷笑を懼れず紹介する。

*1 水を張ったフライパンの蛙が、初めはいつでも出られるからと安心し、ぬるま湯に気持ちよくしているうち、終には茹で上がってしまうという比喻。

◇ 事故調報告書 やじ馬評

主原因は4報告共、津波としているが、高線量で現場に入らず、真相は現状不明。驚きは1・2・3号機とも、初動や安全装置作動中の現地対応に、無知やミスがあったこと。他にも著作を多数読んだが、何れも聴き取り情報でリアリティーを欠く。最も真贋を得たのは、菅前首相の著書*2である。3.14深夜、RCIC(安全装置)で冷却できていた2号機が、3号機爆発直後、圧力が急激に上昇、まさに打つ手なし。ここで東電社長の電話と70人残しの退避があった。しかし 3.15 早朝4号機爆発、同時に2号機圧力が急降下、奇跡が起きたのである。実に爆発で危機となり、爆発により救われたのだ。現場に何人残ろうと対応する術を失えば、不作為＝放棄【撤退】*3である。なお、3号機はプルサーマル Mox 燃料を使用していた。プロトニウムの放出があった筈？更に世界が目にした海洋汚染に4報告とも全く触れていない。分厚さばかりで懐疑なり。

(ページ数)	国会(641)	政府(448)	民間(403)	東電(352)
事前の備え	先祖(人災)	能力不足	認識の甘さ	想定外
現地対応	非は問えない	対応ミスあり	重大エラー有	ミスは多い
官邸介入	指揮混乱	弊害大きい	過剰一部隊	無用の混乱
全面撤退	官邸の誤解	断定出来ず	可能性あり	あり得ない

*2 「東電福島原発事故総理大臣として考えたこと」幻冬舎新書(¥860)本文ex.『福島原発事故を総理として経験した政治家として、何としても脱原発を実現させたい。』

*3 やじ馬の推論は、現場に身を賭して自主的に残った。しかし本店(社長)は命令限界、人命優先と企業の論理で、全面撤退を覚悟して政府に相談した。答弁は後述の辻褄合わせ…類見解のブログあり： 桜井淳氏 (元原研勤務、理学博士、技術評論家、1946年群馬県田新田町生まれ、木崎中学出身、夢の実会に同級生が… ネット検索方

◇ 社説の比較検証

産経、読売が原発維持、日経がやや右寄ながら中立、東京、毎日、朝日と左寄順に脱原発主張と分析する。同様なことをした

	東京	毎日	朝日	日経	読売	産経
浜岡停止 (11.5.7付)	評価する国民的議論始めよう	評価する困難回避先手打つべし	危ないなら、止めるべし	唐突、丁寧な説明が必要あり	停止やめめし万全を尽くせ	唐突、原発否定に繋がるまいか
30年代ゼロ (12.9.15付)	大いに評価、もっと早くゼロへ	180度方針転換を評価する。	評価する核燃料サイクルの凍結	安全保障、国民生活責任感低い	戦略に値せず経営者雇用難あり	日本没落の空論即撤収25%超へ

学者(専修大藤森研教授)がいた。全国46紙の社説を一年半もナビ分析。結果は脱原発:東京、毎日、朝日など28紙、減原発:日経、中国など14紙、原発維持:読売、産経の2紙で、福島民報、福井の2紙は方向性示さず(地元・過去のしがらみ?)。やじ馬のピンポイント検証と大差なし。各社の主張は一貫してブレはなく、強い信念を感じる。

従って、日常読んでいる新聞により、思考が洗脳されると心得たい。東京と産経を読み比べると、学ぶこと多いのかも…。

因みに最近の世論調査では、30年代より前に原発ゼロ:36%、30年代:15%、30年代より後:11%であり、ゼロにしない:31%、回答なし:7%であった。将来的に原発ゼロを望む人が、全体で62%を占める(12.10.03朝日)。選挙の争点になるはず…!

◇ エピローグ 3・11が遠くほど、脱原発の声は風化するはずとの見方があった。だが、逆に原発ゼロを望む人が徐々に増えている。それは原発の「安全、コスト、廃棄物処理、核燃料サイクル、Co2排出、電力不足」等、全ての欺瞞が解け、被曝国なるが故、原発推進を秘密裏に進めたツケが廻って来たのである。現実10年後には、核廃棄物の保管場所が無くなる。この解決なくして原発稼働はあり得ない。フクシマの瓦礫すら、受入れ先が決まらないのである。故に、「出来る限り早い原発ゼロ」が模範解と考える。しかるに産経、読売が主張するように、安全保障や国際的しがらみの課題があることも知った。再生可能エネルギー太陽光、風力の課題も学んだ。一方で、火力の高効率化や省エネ(製品、住宅、送電等)、電力自由化と発送電分離、日本型スマートグリッド、更には領有海域に潜在する海洋エネルギーやメタンハイドレート等、ポジティブな話題もある。これら将来性ある資源への投資が、国益に適い子孫への遺産になるものと考え。…等々、やじ馬がこれまでに学んだ知見を、これからも当分投稿を続けさせていただきます。 …ご笑待下さい。

第3話了 (2012.12.01)